時間的段階を表す後項動詞について

呉　　美善

はじめに

動詞は、「読ム、読マナイ、読ンデイル、読ンダ、読ンデイク、読マセル、読ミマス」などのように、「読」のような中心となる変わらない部分（いわゆる生成文法のMain Verb，多くは語幹と呼ばれる）と「ム」「マナイ」のような変わる部分とで様々な述語としての使われ方を持つ。このような動詞の叙述の多様な表現は、ムード、テンス、アスペクト、ヴォイスというような文法的カテゴリーで分類、整理されたりするが、その中で特に「動作の展開の様相、つまりある動作の進行過程をその時間的段階によってとらえる」というところに的をしぼったのがアスペクトの研究である。動作の展開の様相とは、「読む」「食べる」「書く」のような動作を表す動詞が「居る」のような状態を表す動詞と区別される性質で、たとえば完了 ― 不完了、持続 ― 瞬間、開始 ― 終結、1回 ― 反復などの区別やその個々の表現といわれる。(注1)　これらの区別は、それぞれが動作の進行していく過程の中の一つという共通点から、時間的段階によりまとめることができる。「読む」を例にとると、「読もうとする」、「読みはじめる」、「読むという動作が続く」、「読むという動作が終わる」などの進行過程が考えられる。

また、アスペクトはその表われ方も一様でなく、活用語尾、助動詞、補助用言などの形態が用いられる。それぞれの機能から考えて、寺村氏はアスペクトの文法形式を次のようにわけている。(注2)

A、（動的）動詞の活用語尾（ルとタ）

B、動詞のテ形に後接する補助動詞

　（テ）イル、（テ）アル　など。

C、動詞の連用形に後接する補助動詞

　（動キ）ハジメル、（動キ）カケル、（降り）出ス、（思イ）切ル　など。

この分類によると、タは「活用語尾」になっているが、本稿ではタは「助動詞」

に入れる。また、「（動キ）ハジメル」の「～ハジメル」なども、補助動詞化したもので、動詞の一つの形として認め、後項動詞と呼ぶことにする。

AとBの場合、変わらない部分は「読」のような単純要素で、動作の展開が感じられる部分は「ル」「テイル」のような後接要素である。これに対しCは、変らない部分が「読ミハジメ」のような複合要素で、動作の展開はそれ自体からも考えられる。また、Cはどの程度までをアスペクトの表現にするかについていろいろ議論されているところで、(注3)　寺村氏等はCを「第2次的アスペクト」と呼んでいる。認定範囲の他にも、「読む」のような動詞は、「読みはじめる、読みつづける、読みおわる」のような段階の形が存在しうるが、「太る」のような動詞は、「太りだす、太りつづける」とは言うが「太りおわる」とは言いにくい、というような結合のあり方にも相違点が見られる。

本稿では、時間的段階を表す後項動詞にはどのようなものがあり、それはどういう意味、用法を持つかという問題を中心に考えたい。

なお、例文の中の「教」は教育出版、「光」は光村図書の小学校の国語の教科書である。その他の例は筑摩書房の現代日本文学大系の中からとったものである。

1.　時間的段階を表す後項動詞

まず、時間的段階を表す後項動詞は、その進行過程における時間的段階により、ある動作が始まる「開始」、ある動作が成される前の状態である「将然」、(注4)ある動作が一定の時間続く「継続」、ある動作が終わる「終了」にわけることができる。各段階にはそれぞれいくつかの後項動詞が存在するが、同じ段階に属していてもその意味と用法が必ずしも同じとは言えない。その差は、単純語としての意味を正確に把握していれば、大体類推できるものではあるが、単純語としての意味がそのまま用いられたり、その意味のある部分が強調あるいは拡張され用いられたりして、意味変化に流動性(注5)　を含んでいるため、使いこなすにはかなりの時間が要る。類似する用例をいくつも経験しながらその異同を体得していかなければならないからである。学習者の立場からみると、程度の高い段階に属するものであるが、いつかは整理しておく必要がある事項だとも思われる。

2. 「開始」の意味を表す後項動詞

「開始」の意味を表す後項動詞は「～はじめる」「～だす」「～かける」があげられる。（詳しくは拙稿「「～だす」及び開始の意味を表す後項動詞について」、『ことば』4号所載。ここではその概略にとどめる）「～はじめる」「～かける」は対応する自動詞形「～はじまる」「～かかる」を持つが、自動詞形の場合は「～はじまっている」「～かかっている」のように「～ている」という形をとる場合が多い。「～だす」には対応する自動詞形は存在しない。「～でる」は空間的移動のみを表す。

「～はじめる」は「開始」という、動作の一過程の中のどの時点であるかを直接示す用法のみなので別に問題はないが、「～だす」と「～かける」は、後項動詞が動作の一過程を表す場合とそうでない場合とがあるので、注意を要する。たとえば、「玄関へ飛びだしていきました」の「～だす」は外部への移動を表すが、「とつぜん海があれだしました」の「～だす」は「開始」を表す。また、「彼女はスキーぐつをしき居に立てかけた」の「～かける」は「重さを対象にあずけて位置を固定させる」(注6)という単純語としての意味をそのまま表すが、「おもい心で、彼はかべのあなへもどりかけた」の「～かける」は「開始」の意味を表す。

この区別は、語義（範疇的語義）(注7)　によってその語が結合・共起するものが異なるという語の特性があるため、それほどむずかしくはない。つまり、「外部への移動」を表す「～だす」は、「部屋から玄関に飛びだす」のように「～カラ～ニ～ダス」という文型が想定されるが、「開始」の「～だす」は「～カラ～ニ」のような出発点、到着点を示す共起部分は必要としない。「～かける」の場合も、「安定させる」という意味を表す場合は、「スキーぐつ」のような「不安定なもの」、「しき居」のような「支えになるもの」が必要であるが、「開始」の「～かける」はそのようなものは必要としない。両方とも形態面からの区別ができるためそれほどに問題はないと思われる。むしろ、問題になるのは「開始」を表す後項動詞間の類義語的関係である。以下、簡単にその類義語的関係を示すことにする。

「～はじめる」は、開始の瞬間だけではなくその状態が継続しているので、動

作が進行中であることを表す「～テイル」とあわせてよく用いられる。

… 路上の汚物のように扱いはじめているのに気がついていない。（瀬戸内晴美、「夏の終り」）

また、その「開始」は緩慢な場合が多い。

が蕗は退屈を感じ、しだいに息詰りはじめていた。（芝木好子、「湯葉」）

「～だす」は、「火事を出す」のような「今まで無かったものを新たに生じさせる」という単純語としての意味からも想像できるように、「開始」のその時点に重点がおかれる。そのため、様態の助動詞「そうだ」と結びついて、動作・作用が行われる直前を表す次のような表現も可能になる。

なきだしそうなこえで、チックとタックがさけびました。（光1下）

また、突発的で急な「開始」が多い。

とつぜん海があれだしました。（教3下）

2人とも、にわかに泣きだしたようじゃ。（教6下）

「～かける」の「開始」は、いちおうある動作・作用がはじまって途中まで行われたことを表す。

「り、りー。」と、しのちゃんは言いかけましたが、みんなどっとわらったので、目になみだをためて下を向いてしまいました。（光3上）

寺村秀夫氏によれば、この動作・作用の中断の要因は主体自らの意図よりは、他のこと、ある他の何ものかによる場合が多い。(注8)　上の例文で、しのちんが言うことを中断した要因は、みんながどっとわらったことにある。中断されたのは反意図的なことであっても、主体の意志で前項動詞の動作・状態に入ったことを表しているため、主体の意志でやめることもできるし、あとで元の状態にもどることもできる。言うのを途中でやめさせられたしのちゃんは、再び言いはじめることもできるし、そのままやめることもできる。

以上のような「～はじめる」「～だす」「～かける」を「主体の意図」という面から整理すると、「～はじめる」は人間の意によって行われる行為に、「～だす」は意図とは関係のない叙述を表す場合に、「～かける」は意図していない反意図的結果を表す表現によく用いられる。

3. 「将然」の意味を表す後項動詞

次のような「～かける」は、前項動詞の動作や作用がはじまったという「開始」の意味ではなく、前項動詞の動作・作用が行われる寸前の状態に達したことを表す。

いつのまにか、日もくれかけました。（光2 下）

それにしても、死にかけている、とはどういうことであろう。（三浦哲郎、「恥の譜」）

「～かける」に対応する自動詞形「～かかる」にも「将然」の意味を表す用法がある。

ふた葉は、先のほうが茶色になって、かれかかっている。（光3 上）

立ち止まって、しばらくの間しみじみとながめていたが、ふと、しおれかかった木があるのに気づいて、所員に声をかけた。（教5 下）

姫野昌子氏によれば、「将然」の意味を表す「～かかる」は「～かける」と言いかえられるが、その逆は成立しない。(注9)

「将然」の「～かける」を金田一春彦氏は「死にかける」は「死に始める」という意味ではなくて、「死ぬ寸前の状態に達する」の意である。(注10)

と述べ、「将然態」と名付け、「～はじめる」のような「開始」を表す後項動詞と区別している。辞書にも、

もう少しで … する。「私が火事を起しかけたのだ」（学研国語大辞典）

今にもその事が実現しそうな状態にある。「消えかける」（新明解国語辞典）

上の動詞の表わす動作や作用を、始めそうになる。（日本国語大辞典）

など、「将然」の用法についての記述が見える。

4. 「継続」の意味を表す後項動詞

「継続」の意味を表す後項動詞としては「～つづける」があげられるが、共起の部分にも現われるように次のような意味の幅を持つ。

まず、ある動作・作用がとぎれず行われるという意味を表す「～つづける」がある。これは、「ずっと」「休まず」「いつまでも」のような同じ動作がそのまま継続していることを示す修飾語句があわせて用いられることが多い。

川は日の光を照り返しながら、いっときも休まず流れ続ける。（教６上）

……夫妻は、手を取り合ったまま、いつまでもうっとりとながめ続けた。（教５下）

同じ意味の「～つづける」の中で、ある動作・作用が長い間続いたことを表すものがある。長い時間ということを示す修飾語句「長い間」とか、「も」のような時間の長さを強調する語句などが共起される場合が多い。

マリーは、祖国ポーランドを思い、年老いた父を思って、一年余りも迷い続けた。（教５下）

こんなにも長い間、子孫をたやすことなく生きつづけてきた動物は …（光４上）

また、ある決められた時間まである動作・作用が続くという意味を表す用法もある。これは「時の表現＋まで」という語句とともに用いられる。

そしてそこで、夜明けまでおどりつづける。（教２下）

以上の「～つづける」は、連続的動作・作用という共通点を持つものである。さらに、次のような意味の「～つづける」もある。すなわち、一つ一つの断切された動作・作用が適当なインターバルでくりかえされる反復動作・作用の表現である。

毎日、３キロメートル、４キロメートルと走り続けたが、いつの間にか熱が冷めてしまった。（光６下）

毎日毎日映画館に通い続け、しまいには係の人に変な目で見られるようになった。（光５上）

以上のように、「～つづける」は、それが終わるものであるかどうかは問題にしていない継続動作・作用を表すものである。

これに似たものとして、継続動作・作用に「最後まで」という意味がプラスされた「～とおす」がある。「とおす」は単純語として用いられた時も、「学生時代ずっと一番で通した」のように「初めから終わりまで～しつづける」という意味や「やりたいことを通す人」のような「最後まで～する」という意味があり、最終段階まで同じ動作・作用を続けるという意味であることは容易に理解できる。

自分をぎせいにしても、おおかみのほこりを守り通して死んでいくのだ。

（光4下）

… と淳子は考え、ほんとにいいのでおしとおした。（教6下）

この「～とおす」に似たものに「～ぬく」がある。

… 何者をもおそれず戦いぬいてついにたおれた、そうれつなしょうがいであった。（光6上）

苦しいレースを走りぬいて、3位に入ったとき …（光5上）

「～とおす」「～ぬく」両方とも、同じ動作が終わりまで続くという意味を表すが、「～とおす」は最後まで同じ動作が続く過程にその中心があり、「～ぬく」は同じ動作を続けて目的とする最後点に到達したという「目的の達成」に中心的意味がある。

一部に反対もあったが、自分の意見を通し抜いた。

のように「とおす」と「ぬく」をあわせて用いた例からも、「～ぬく」が主体が他のいろいろな状況に関係なく、同じ動作を続け自分の目的とする最後点に到達したという意味がわかる。

5. 「終了」の意味を表す後項動詞

継続する動作・作用の終了という意味を表す後項動詞には「～おわる」と「～やむ」がある。「おわる」は元来他動詞「おえる」に対応する自動詞であるが、「ごあいさつを終わります」「収穫を終わる」のように他動詞としても用いられる。後項動詞「～おわる」も元来は「～おえる」に対応する自動詞形で、「～おえる」が他動詞性を持って他動詞につくのに対応し、「～おわる」は自動詞性を持ち自動詞につくものであった。ところが、現在は自他両用に使われ、(注11)また自他いずれの動詞にもつくことができるようにかわってきた。このような状況から「～おわる」の使用範囲が「～おえる」のそれより広くなってきている。

目のみえるみつばちがほとんど帰り終わってから、少しずつ帰ってきたのです。（教4上）

魚をきれいにならべおわると、こんどは、ねだんのふだを書きました。(光2F)

「帰り終わる」は「自（自動詞）＋終わる→自」の例で、「ならべ終わる」は「他（他動詞）＋終わる→他」の例である。

「～おわる」は主体の意志動作に、「～やむ」は無意志動作あるいは自然現象の場合に使われる(注12)という違いがあることがわかる。

すると沢田さんも、なみだ声もぐっとひと息にのみこんでしまったように、きっぱりとなきやみました。(教4上)

のような場合、「なきおわる」におきかえることはできない。これは、「開始」の意味を表す後項動詞をつける場合も「泣く」は、「泣きはじめる」よりは「泣きだす」のほうが自然な表現になるのと同じ理由である。この他に、「～やむ」は「雨が止む」のような単純語の場合と同じく、風、波、雨、雪などの自然現象の動きが消えてなくなることを表現する。

「～おわる」と「～やむ」は「終了」、つまりあるできごとが時間的に終わりまで行ったということを表すが、内容的にすっかりできあがったという「完了」を表す場合は「～あげる」が用いられる。

その次の市の日までに、おみつさんは、また一つ、わらぐつを編み上げました。(光5下)

2回書き直して、3回目にやっと書き上げました。(光3下)

また、「～あげる」はほとんどの意味・用法に対応する自動詞形「～あがる」を持つ。

…… つうはとんとんからからとはたをおり、そうしてあくる朝には、いつも美しいぬのがおりあがっているのです。(教3下)

橋ができあがったのは、喜永7年(1854年)7月29日…。(教4下)

「～あげる」も「～おわる」のように主体の意志動作の表現に用いられるが、「～あげる」は「～おわる」のような終了の事実だけではなく、動作の終了と「出きあがった事物」の存在が示されなければならない。また、動作の完了そのものに重点が置かれる場合は、その動作の過程の終わりということが示されていて「すっかり」「完全に」終わったということを表す。(注13)

セーターを編む。(O)
セーターを編みあげる。(O)

毛糸を編む。(O)
毛糸を編み上げる。(X)

「セーター」は完成品で「毛糸」は材料である。このように「～あげる」が「出きあがり品」が予想される前項動詞（姫野氏は「創出動詞」と名づけている）と結合する場合は、対象物の名詞に制限が生じる。その対象物の関係として、姫野氏は、「材料と生産物」、あるいは「素材と作品」があるが、材料・素材の名詞は「～あげる」と共起できないと述べている。(注14) つまり、「～あげる」は、動作あるいは作業の終了を表す「～おわる」とは異なり、ものの完了を表すものである。

その他、動作が完全に終了したことを表すものに「～きる」がある。

キューリー夫妻にとって、いちばんりっぱな、いちばん幸福な、仕事でささげきった何年かが、このみすぼらしい物置小屋の中で流れた。（教5下）

のように、「～きる」は主体の積極的な意志で「完全に」「終わりまで」行われて、残るものは全くないという意味を表す。「いやいや食べ終わった」とは言えるが、「いやいや食べきった」とは言えない。「いやいや」と積極的意志から行われる「食べきる」は共起できないからである。また、「～きる」には次のように「十分に」という意味を表す場合もある。

愛情ですから、へいぼんなすみれの花だとわかりきっている花を見て、見あきないのです。（教6上）

これは終了の意味ではなく、「十分に～する」という意味の「～きる」で、説明が要らないほど十分にわかっているという意味になる。

6. おわりに

以上、動作の展開を時間的段階という面からとらえて、「開始」「将然」「継続」「終了」にわけて、それぞれに属する後項動詞について考えてみた。このような後項動詞の表す時間的段階は、

- 読みあげる
- 読んでしまう

- 読みつづける
- 読んでいる
- 読んでいく
- 読んでくる

などのように、動詞のテ形に後接する補助動詞にも存在するものである。両方を併行して動作の展開を考えた方が望ましいと思われるが、今回はそこまで論を進めることができなかった。今後の課題としてまとめていきたい。

注１：佐藤純、「ロシア語」（テンスとアスペクト）、講座日本語学11 明治書院

注２：寺村秀夫、「テンス・アスペクトのコト的側面とムード的側面」、日本語学57年12月号、明治書院

注３：吉川武時、「現代日本語動詞のアスペクトの研究」、『日本語動詞のアスペクト』、むぎ書房

注４：「将然」は、金田一春彦氏の「将然態」をかりた用語である。

注５：国広哲彌、『意味論の方法』、大修館、「意味のプリズム」という言葉で表現している。

注６：森田良行、『基礎日本語１』、平凡社

注７：仁田義雄、「語彙と文法」講座日本語語彙１、明治書院

注８：寺村秀夫、「活用語尾、助動詞、補助動詞とアスペクト」、日本語・日本文化１、大阪外大

注９：姫野昌子、「複合動詞「～かかる」と「～かける」」、日本語学校論集６号

注10：「国語動詞の一分類」、『日本語動詞のアスペクト』、むぎ書房

注11：注８に同じ。

注12：注６に同じ。

注13：姫野昌子、「複合動詞・「～あがる」、「～あげる」および下降を表す複合動詞類」、日本語学校論集３号

注14：注１３に同じ。